

方言語彙「いいにする」を用いた短文作成におけるカテゴリカルデータ分析 Categorical Data Analysis in Short Sentence Composition Using Dialect Vocabulary *iinisuru*

矢板橋芳生† 山崎綾一郎† 高井健人† 山岸祐己†‡ 谷口ジョイ†

Yoshiki Yaitabashi Ryoichiro Yamazaki Kento Takai Yuki Yamagishi Joy Taniguchi

1. はじめに

多くの地域方言は、共通語との接触により再編成[1]が生じ、長期的には共通語へと収束 (convergence) する傾向にあるが、その一方で方言形が維持される事例もある。収束に向かわないような言語構造を説明するモデルとして、「顕著性 (salience)」という概念が用いられる[2]。当該モデルによれば、「顕著性がある」、すなわち話者によって「明らかに地域方言である」と認識される方言の特徴は、そうでないものよりも、より早い速度で容易に放棄され、共通語へと取り込まれるとされる。一方で「顕著性がない」もの、つまり母方言話者が「方言だと認識せずに使用する語彙・表現」については、その形式が維持される傾向にある。例えば、静岡方言において、身体的に辛く、苦しい様子を意味する形容詞「エライ」のように[3]、地域方言と共通語が同一の形式をとる場合には、「顕著性がない」とされる。本研究では、この「顕著性」という概念を用いて、共通語に収斂されない方言語彙について論じる。

本研究は、静岡方言「いいにする」を事例とし、共通語への収束が観測されない要因を明らかにすることを目的としている。当該表現は、静岡全域で、あらゆる年代によって使用されていることから選定された[4]。

2. 調査概要

2.1 静岡方言「いいにする」

発表者らがこれまでに行った調査によれば、「いいにする」という表現には多義性があり、以下のように、「中止」「妥協」「許容」「中断」といった複数の用法で用いられることが分かっている[5]。

用法 (1) 風邪気味なので今日の散歩は、いいにする (=しようとしていたことをやめる) 【中止】

用法 (2) (まだ続けるか、と聞かれ) ここまでやったから、今日の仕事はもういいにしよう (=十分ではないが、良いこととして一応納得する) 【妥協】

用法 (3) (こんなに謝っているのだから) もういいにしてよ (=許す/過失などを咎めない) 【許容】

用法 (4) (野菜が食べきれない子どもに) もういいにしな (=続けていたことを終わりにする) 【中断】

また、当該表現は、年代に関わらず、使用・理解の割合が高く、三重県北部、茨城県北部、広島県山間地、新潟県の一部地域、岡山県南部、鳥取県東部など、静岡県以外でも使用されることが明らかになっている[6]。

†静岡理工科大学 Shizuoka Institute of Science and Technology

‡理化学研究所 RIKEN

2.2 調査方法

10,958名を対象とした大規模なオンライン調査を実施し、属性(性別、生年、出身地域、家族の方言使用)および「いいにする」の使用・理解に関する設問への回答を依頼した。調査にあたっては、ユーザー同士がメッセージを送受信することができるアプリケーションを用いて、友人・知人に調査フォームのURLを送信する、あるいはSNSによって調査協力を依頼する、という手法を用いた。うち1,518名から得られた短文作成の回答(自由記述)のうち、有効とされた1300文を4つの意味

(中止、妥協、許容、中断)に分類した上で、これらのカテゴリカルデータに対して独立性の検定、および順位と検定の拡張手法を用いて分析を行った。意味分類にあたって判定に揺れが生じるものについては、著者らで協議し、最終的には多数決判断とした。以下に例を示す。

(1) どっか出かけようと思ったけど、外は暑そうだからいいにする (=やめておく) (静岡県中部・女性・1998年生まれ) 【中止】

(2) もうちつとやつとかつかと思っただけ、今日はあいいにしざあ (=もう少しやっておこうかと思っただけど、今日はもう終わりにしよう) (静岡県中部・女性・1970年生まれ) 【中断】

(3) こんだけ謝ってるんで、おみやあもええかげんにいいにしてやりゃいいじゃん (=これだけ謝っているのだからお前もいい加減に許してあげればいいじゃないか) (静岡県中部・男性・1950年生まれ) 【許容】

(4) おみやーそのきかないじょんじょんええかんおぞくなると、とつといたってしょんないけえ、はあええにしな (=お前、その汚いサンダル、いい加減古くなっていて、とっておいても仕方ないから、もう使うのは諦めな) (静岡県中部・女性・1999年生まれ) 【妥協】

2.3 分析方法

データカテゴリの時系列的変化を明示し、それらを複数カテゴリ間で比較するため、出現順位を用いた統計量によるデータ変換[7]を行う。この手法は、Mann-WhitneyのU検定[8]を基盤とし、多群かつ時系列のデータを扱えるよう拡張したものであり、データの出現頻度の傾向変化をz-scoreとして表現する。静的な分析手法による指標を、動的な視点で捉えられるよう可視化するため、長期的な変化が捉えやすいと言える。また、各カテゴリのz-scoreは、他のカテゴリすべてを基準としているため、複数カテゴリ間における比較が容易である。

3. 結果と考察

方言区分[8]に従い、調査協力者の出身地を静岡県西部方言区分[8]に従い、調査協力者の出身地を静岡県西部(230名)、中部(427名)、東部(183名)・その他(460名)に分類し、独立性の検定を行った結果、 p 値(χ 二乗検定)から、各地域における年代と当該表現の使用には関連性が見られなかった(表1)。

地域	全世代		一部世代を除く	
	p 値	χ 二乗値	p 値	χ 二乗値
県西部	0.807	10.205	0.446	8.907
県中部	0.210	19.078	0.369	9.775
県東部	0.421	15.433	0.382	9.624
その他	0.755	10.966	0.550	7.844

表 1 独立性の検定の結果

図 1 「いいにする」の用例別使用・理解(静岡県中部)

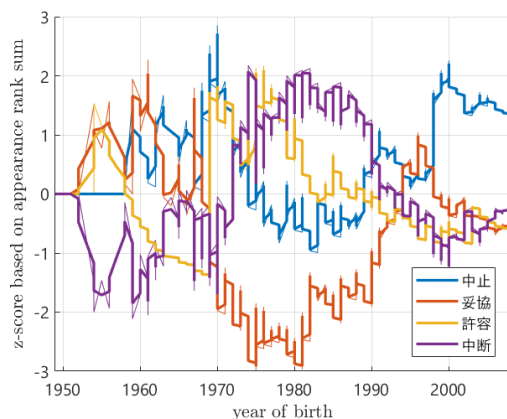
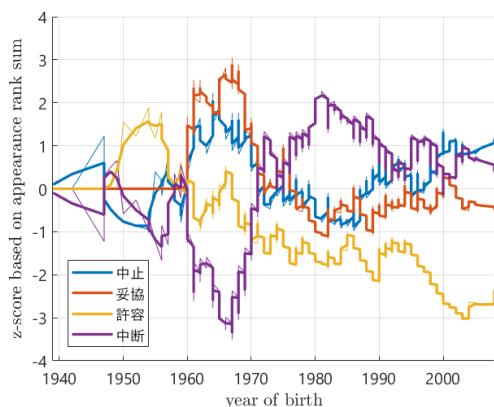


図 2 「いいにする」の用例別使用・理解(その他地域)



一方、多群順位出現統計量による可視化結果によれば、静岡県中部地域においては、1960年代から1970年代

に生まれた調査協力者が「中止」および「妥協」の意味で当該表現を主に使用していることが示唆され(図1)、他の地域とは異なる傾向を示している。加えて、その他の地域の1970年代から1980年代生まれの協力者に着目すると、「中断」の意味での使用が増加傾向にあるのに対し(図2)、「妥協」は減少傾向にあった。2000年(生年)に近づくにつれ、両者の使用頻度には差がなくなり、「許容」の用法の使用頻度が著しく低下していることが分かる。

4. まとめ

複数の設定による独立性の検定の結果から、「いいにする」という方言語彙は、地域、年代に関わらず、広く浸透していることが明らかとなった。この結果には、冒頭で述べた「顕著性(salience)」が関わっており、話者が当該表現を地域変種であると認識していない可能性が高い。また、検出したカテゴリの出現頻度の傾向変化から、県中部における1960年代生まれの調査協力者において「妥協」の意味での使用が顕著であるなど、他地域とは異なる傾向が見られた。このように、多群順位出現統計量は各カテゴリの出現頻度の傾向変化を捉えることが可能であることが示唆される。

参考文献

- [1] Inoue Fumio. 4 Style, prestige, and salience in language change in progress. In: Asahi, Y., Usami, M. and Inoue, F. ed. Handbook of Japanese Sociolinguistics. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton. (2022)
- [2] Auer, P., Barden, B., & Grosskopf, B. "Subjective and Objective Parameters Determining 'Salience' in Long-term Dialect Accommodation." Journal of Sociolinguistics, Vol. 2(2), pp. 163–187 (1998).
- [3] 朝日祥之. 方言接触とことばの変化. 日本語学会秋季大会予稿集, pp. 29–32 (2010).
- [4] 峯尾海成・門戸巧・山岸祐己・谷ロジョイ. 静岡方言
- [5] 「いいにする」の使用・理解:カテゴリカルデータ分析手法を用いて. 情報科学技術フォーラム講演論文集, Vol. 22, pp. 273–274 (2023).
- [6] 峯尾海成・谷ロジョイ. 静岡方言「いいにする」の多義性およびその使用・理解. 日本方言研究会研究発表会発表原稿集, Vol. 116, pp. 9–16 (2023).
- [7] 峯尾海成・門戸巧・神戸聖寧・山岸祐己・谷ロジョイ. 大規模調査による地理情報を用いた方言形の分布および変化予測. 第86回全国大会講演論文集 (2024).
- [8] 山岸祐己, 清斗, 斉藤和巳. 多群出現順位統計量に基づく時系列データの変換. 情報処理学会論文誌数理モデル化と応用 (TOM), Vol. 11, No. 1, pp. 45–52 (2018).
- [9] H. B. Mann and D. R. Whitney. On a test of whether one of two random variables is stochastically larger than the other. Ann. Math. Statist., Vol. 18, No. 1, pp. 50–60, 1947.
- [10] 中條修『静岡方言の研究』吉見書店.(1982).